

## ギヤスケル夫人の生涯と作品

松岡光治

産業革命を契機に世界の綿工業の中心地となったマンチェスターの南、およそ二十キロの所にナッツフォードという小さな町がある。ギヤスケル夫人の父ウィリアム・ステイーヴンソンは、その近くのサンドルブリッジ・ファームに住むサミュエル・ホラード（『従妹フィリス』のホルマン牧師のモデル）の娘と一七九七年に結婚した。彼は大蔵省記録保管所の管理者であったが、牧師になる訓練を受けた経歴を持つ有能な人で、四年間ほど実験農場に従事したこともあり、それが高じて主要な雑誌に論文や書評などを寄稿していた。ギヤスケル夫人（エリザベス・クレグホーン・ステイーヴンソン）は、このようなユニテリアン派の両親の第八子（兄のジョン以外はすべて夭折）として、一八一〇年九月二十九日（土曜日）、ロンドンのチェルシー地区のリンゼイ・ロウ（現在はチェイニ・ウォークの一部）で産声を上げた。しかし、エリザベスの母は産後の肥立ちが悪く、彼女を出産して十三ヶ月

後に亡くなってしまった。それで、エリザベスは即座に亡き母の姉にあたるナッツフォード在住のハナ・ラム夫人の養子となり、この古めかしい平穏な田舎町で暮らすことになる。彼女の伯母は痛ましい理由で娘と二人だけの生活を余儀なくされていた。エリザベスは身障者だった娘のメアリ・アンの遊び友達になり、この従姉が結核で急死したあとは、伯母を第二の母として敬愛した。そして、近隣にはホランド一族の者たちが大勢いて、エリザベスの祖父の家によく遊びにきていたので、彼女はそういった人たちにも可愛がってもらっていたそうである。

非国教徒、特に三位一体説を排するプロテスタントの一派であるユニテリアン派は、男子だけでなく女子に教育を受けさせることに重きを置いていた。そうした理由で、エリザベスはフランス革命時の亡命者からフランス語とダンスの指導を自宅で受けたあと、十二歳でウォリックシャー州の村、バーフォードに住むバイ

アレイ姉妹の女子寄宿学校へやられた。この学校は一八二四年にシエイクスピアの生地ストラットフォード・オン・エーヴオンに移ったが、そこでの教育の質は非常に高く、選取できる科目も幅広く、更には雰囲気も解放的であった。つまり、彼女は自分の知性、そして田園趣味と調和した環境の中で過ごすことができたわけである。一八二七年に卒業した時には、教養のある友人たちの証言によれば、明朗快活で魅力的な女性になっていたそうだ。ナッツフォードに帰郷した彼女は、翌年たった一人の兄ジョンが行方不明になったという知らせを受け、ロンドンへ戻ることになった。東インド会社の仕事で東洋へ行っていた兄が、どうして行方不明になったかは全くの謎だが、この兄を失った悲しみは『克蘭フォード』におけるジェンキンス姉妹の兄や『北と南』のヒロイン、マーガレット・ヘイルの兄のエピソードとして描かれている。エリザベスはロンドンに戻ると、自分が四歳の時に父がかかりつけの医師の妹と再婚していたことを知った。この義理の母と会った時、彼女は好感ではなく反感を抱いたようで、『妻たちと娘たち』に登場するモリーの義理の母ギブソン夫人の性格づけは、この時の印象を反映していると言われる。エリザベスはそのままロンドンに留まったが、一八二九年に父が亡くなると、銀行に勤めていた伯父スウィントン・ホランドや医者をしていた従兄ヘンリー・ホランドの家に滞在した。この時の回想は『北と

南』の冒頭に見られる。そのあと、ヘンリー・ホランドの伯父で、イングランド北部の港市ニューカッスル・アボン・タインに住んでいた博愛精神が旺盛なユニテリアン派の牧師、ウィリアム・ターナー（『ルース』のベンソン牧師のモデル）の家で二度の冬を、そしてコレラ感染を避けるために彼の娘アンと一緒に行ったエディンバラでひと冬を過ごした。この当時、若いエリザベスの美貌は常に賞賛的で、エディンバラでは何人かの画家や彫刻家が彼女をモデルにする許可を求めたと言われている。

一八三一年の秋、エリザベスとアンはマンチェスターに住むアンの姉夫婦を訪ねた。アンの義理の兄、ジョン・グーチ・ロバーズはユニテリアン派のクロス・ストリート教会の牧師で、エリザベスは彼を通して牧師補佐になりたてのウィリアム・ギヤスケルと出会うことになる。恋に落ちた二人は一八三二年八月三十日（木曜日）にナッツフォード教会で結婚し、ウエールズへ一ヶ月の新婚旅行に出かけた。マンチェスターのユニテリアン派の集まりは文化生活の点で傑出した存在であった。クロス・ストリート教会はユニテリアン派の中心地となり、彼女の夫はそうした集まりの中心人物だった。ギヤスケル夫妻は、夫と妻、父と母という基本的な役割を否定したりしない、相互の自主性と性格を尊重できる、そして感受性が鋭くて知性にあふれる人たちであった。結婚して以来ずっと、相手の仕事や習慣に理解を示し、お互いに支

えあっていたことは、彼女が残した手紙が雄弁に語っている。ギヤスケル夫人にとって結婚に伴う唯一の損失は、マンチェスターに住むためにナッツフォードを離れなければならなかったことである。現在のナッツフォードはマンチェスターから簡単に通勤できる郊外にあるが、十九世紀前半は古風で静かな田舎町であった。結婚後およそ十年間、ギヤスケル夫妻はドーヴァー・ストリートに住み、そこから一八四二年にアッパー・ラムフォード・ストリートへ移り、一八五〇年にプリマス・グロウヴの家（現在はマンチェスター大学留学生協会の本部）に落ち着いた。これらの家が位置していたのはいずれも、その当時はマンチェスターのはずれだったのだが、彼女はこの都市の雰囲気にも強い影響を受けた。同時に、彼女は産業都市マンチェスターの世界における指導的立場に感嘆し、そこに生きる人々に敬意を表した。もっとも、空がどんよりした陰気なマンチェスターに対して愛着と嫌悪が共存する態度は、初期の社会問題小説に現われているだけでなく、彼女が晩年の作品でナッツフォードの世界を強調したところにも見られる。

ギヤスケル夫人は結婚後の十五年を家庭の仕事と社会奉仕に費やした。最も悲しかったのは一八三七年にナッツフォードのラム伯母さんが死んだことだったが、この伯母は彼女に八十ポンドの年金を残してくれた。この間には創作活動の兆しも幾つか見ら

れ、彼女は十四行詩や物語詩などを書いている。一八三八年に著名な作家であり編集者であるウイリアム・ハウィットが『名所探訪』出版の意図を伝えると、ギヤスケル夫人は手紙を書いて、ストラットフォード・オン・エーヴォン時代に知ったクロプトン・ホルルの話を提供した。この話は喜んで受け入れられ、一八四〇年に彼女の最初の出版物として世に出た。このハウィット夫妻との交友関係は長きにわたって続くことになる。このように、彼女は何かを書きたいという衝動に時おり駆られることがあったが、一八四五年のウエルズ旅行中に生後十ヶ月たらずの息子ウィリアムを猩紅熱で亡くしたあと、その衝動がはつきりとした形で現われることになった。彼女の夫は妻を励ますために何かを書いて悲しみを紛らわせてはどうかと言い、生まれて初めての小説に着手させたそうである。彼女は第一巻の原稿をハウィット夫妻に送ったが、二人とも大いに満足してくれた。この本は一八四七年に脱稿となり、複数の出版社へ送られた。いつもながらの返事の遅さに、彼女はそのことをすっかり忘れていたようだが、最終的にチャップマン・アンド・ホール社によって百ポンドで買い取られた。こうして、『マンチェスターの生活』という副題を持つ『メアリ・バートン』が、一八四八年十月十八日に匿名で出版され、『大センセーション』を巻き起こしたのである。トマス・カーライルは賞賛の言葉に満ちた祝福の手紙をくれ、マライア・エッジワー

スは死の直前だったにもかかわらず、この小説の重要性を熱烈に語った。

『メアリ・バートン』は標準的なロマンスの筋に沿って展開する。母のいない職工の娘、メアリ・バートンは工場主カーソンの息子にだまされそうになる。その筋と平行して、不況の波がマンチェスターを襲い、労働争議の気運が高まる中、組合の抗議運動として工場主の息子を殺すために、くじ引きでメアリの父ジョン・バートンが選ばれる。彼は殺人の罪を犯すが、皮肉にもその嫌疑は娘のメアリのことを愛しているジェム・ウィルソンにかかる。紆余曲折を通して、メアリの身を持ち崩した叔母エスターによって真実が明らかにされ、死刑の判決を受ける直前に、ジェムは危機一髪のところを助けられる。結局、死に際にバートンは息子を殺されて復讐心に燃える雇主カーソンと和解し、メアリとジェムはカナダに移住する。しかし、このようなプロットの要約では、この小説が持つ迫力の「は」の字も伝えることはできない。読者の心に迫ってくるのは、マンチェスターの悲惨な生活や、ジョン・バートンを殺人に追いやる苦境に関するギヤスケル夫人のリアルな描写である。その社会観察の正確さは『イギリスにおける労働者階級の状態』（一八四四 四五）におけるフリードリヒ・エンゲルスのとよく比較される。

問題の解決としてキリスト教の倫理に頼るのは安易すぎると言

えなくもないが、『メアリ・バートン』には決して重苦しい感じはない。マンチェスターの工場主やロンドンの保守系新聞は、この小説が雇主たちに対して公平でないと不満を示したが、批評家たちは作品の質やエピソードに添えられたユーモアを高く評価した。一年もしないうちに匿名は見破られ、ギヤスケル夫人はロンドンの文学界でもはやされるようになる。この新人作家は流行作家ディケンズによって心からの歓迎を受けた。一八四九年五月にギヤスケル夫人は彼と一緒に食事をしたが、そこには『デイヴィッド・コパフィールド』の第一分冊の出版を祝うために、カーライルやサツカレーをはじめ、有名人が多く同席していた。一八五〇年のはじめ、ディケンズが週間雑誌『暮らしの言葉』の創刊を計画していた時、ギヤスケル夫人はこの上ない賛辞の言葉とともに寄稿を要請され、その年の三月三十日に出版された新雑誌の創刊号には、ワーズワース的な罪意識、自責の念、悔い改めを扱った彼女の短編小説「リジー・リー」が巻頭を飾っていた。以後、編集者ディケンズと寄稿者ギヤスケル夫人との間には、双方に時々いらいだちが見られはしたものの、長い交際が始まることになる。

『メアリ・バートン』出版以前にも、すでに幾つかのマイナーな物語が他の定期刊行物に掲載されていた。一八五一年の未までに更に十点の作品が出版されたが、その中には彼女の中編小説

(ヌーヴェル)の最初となり、シャーロット・ブロンテが絶賛した穏やかな田舎を舞台とする恋物語『荒野の家』が含まれている。それから、彼女の一番有名な作品『克蘭フォード(女だけの町)』が世に出ることになる。『克蘭フォード』の最初の二章にあたる「克蘭フォードの社交界」は、『暮らしの言葉』の一八五一年十二月十三日号に掲載された。これは一八四九年にアメリカで最初に出版された、イングランドの最後の世代」という初期のエッセイを小説化したものである。克蘭フォードの町では、生まれはいいが収入の少ない御婦人たちが、節約しながらも優雅に服装と礼儀作法の伝統を守っている。変わり行く前のナッツフォードを書き留めるために、ギヤスケル夫人は自分が少女時代を送った時にすでに時代遅れとなっていた生活様式を、ユーモアと愛情を注いで再現した。そういった点にこそ『克蘭フォード』の魅力があると言つてよい。このような御婦人方の服装や行動は風変わりではあるが、彼女たちが見せる本質的な人情と善意はいつまでも読者の記憶に残るのである。克蘭フォード(ナッツフォード)とドランプル(マンチエスター)は対照をなす価値観と生活様式を象徴している。そこには当時の社会や産業の急速な変化によって引き起こされた、人々の態度の変化についてのギヤスケル夫人の正しい認識が見られる。彼女は伝統的な価値観を描きながらも、新しい社会と思想が望ましく必要なことを認識していた。だが

らこそ作品の中で因襲と革新を調和させようとしたのである。

『克蘭フォード』のもともとのエピソードは、上品な節約の主導者デボラ・ジェンキンスと彼女の妹マティを軸に創作された。そして、新たに年配の男やもめブラウン大佐が二人の娘を連れて、この田舎町克蘭フォードに移り住むようになる。この家族は女武者のみからなる部族アマゾンのような男まさりでたくましい御婦人方に受け入れられ、ブラウン大佐は男であるにもかかわらず、その腹藏ない正直さで彼女たちを首尾よく味方に引き入れる。しかし、大佐の長女は最後に病死し、その死に際に大佐もまた子供を助けようとして汽車に轢かれて死んでしまう。そして、次女に忠誠を誓ったゴードン少佐が戻ってきて、彼女と結婚する。ギヤスケル夫人としては最初の二章で完結させるつもりだったが、デイケンスが『暮らしの言葉』の編集長として彼女にもっと書いてくれと懇願したので、一八五二年一月から翌年五月までの間(『ルース』執筆に集中するために途中で間隔があくことがあったものの)、定期的に幾つかのエピソードが更に掲載されることになった。その間に、ギヤスケル夫人の関心が他の方向に移り、作品構造も変わってしまった。彼女は評論家で社会思想家のジョン・ラスキンに次のように語っている。『克蘭フォード』の最初の部分は『暮らしの言葉』のために書いた一断片にすぎません。更に書き加えるつもりなどなかったので、自分の意思

に背いてブラウン大佐を殺してしまったのです。「このエピソードを膨らまして連載物にするために、彼女はデボラを始末し、心やさしい妹マティーを中心人物に据え、最後にインドから舞い戻ってくる行方不明の兄を軸に、基本的なプロットを展開させていった。しかし、その関心の対象は依然として人情、人間関係、そして社交界の礼儀作法に向いたままであった。死ぬ数カ月前に、ギヤスケル夫人はラスキンに対し、「これは私が書いた本の中で、再読に耐えうる唯一のもので、私は病気になる時は迷わず、『克蘭フォード』を選びます。読んで笑うことでしょう。間違いありません。だって、灰色のフランネルの上着をまとった雌牛を見たのは本当なんですから・・・」と打ち明けている。晩年の作品で彼女はナッツフォードの世界へ回帰したが、この作品ほど楽しいものは二度と生まれなかった。

一八五〇年八月、ギヤスケル夫人は湖水地方にあるジェームズ・ケイ・シャトルワース卿の別荘を訪問中に、そこでシャーロット・ブロンテと知り合いになった。シャーロットは五一年、そして五三年にマンチェスターのギヤスケル家を訪問した。ギヤスケル夫人はシャーロットが本当に大好きになり、同時にとても彼女の境遇を哀れに思った。五三年の秋彼女はブロンテ姉妹の住むハワースを初めて訪れた。一八五一年から翌年にかけて、ギヤスケル夫人はチャップマン社が五百ポンドで買い取ることになる『ルース』

もまた手がけていた。彼女がプロットの初期段階で下書きを送った相手であるシャーロットは、批評家たちが『ルース』だけに集中できるように、自分の出版社にかけあつて『ヴィレット』の出版を数日のあいだ延期させるほど、それほど親友の小説を賞賛したと言われる。

『ルース』の主題はまたもや論争を巻き起こした。今回は墮落した女をほとんど不可避免的に売春婦として村八分にしてしまつ、そうした因襲的な道德観に支配された陣営の怒りが、論争の火に油を注ぐことになった。売春婦をオーストラリアに移住させるというクーツ女史の計画に協力したデイケンスの影響を受けて、こういった主題を選んだのかもしれないが、実際にギヤスケル夫人はすでに『メアリ・バートン』の中でエスターを使って、墮落した女の問題に触れていたのである。これまでと同様に、彼女は自分の知っている人々や背景に基づいて描いた。世慣れない非国教派の牧師サーストン・ベンソンは、金持ちの息子ベリンガムに誘惑されて捨てられたルースの世話をし、彼女の不義の子と一緒に育て、彼女が後家であるという嘘がばれた時にも、彼女の味方をする。コレラが蔓延する中、看護婦となることでルースが墮落した我が身をあがない、彼女をもてあそんだベリンガムの世話しながら死んでいくというメロドラマ的な結末は、まだギヤスケル夫人がプロットのために、そうした劇的な結末に頼らざるを得な

かったことを示している。この小説の力強さは、寛容さと厳しい道徳観が真つ向から衝突する時、非国教徒からなる小さな地域社会の人間が、社会的にどのようなふうかを描き出した点にある。新興ブルジョワジーのブラッドシヨウ氏は独善に関する素晴らしい研究の成果であり、一年後にディケンズが『ハード・タイムズ』で滑稽に描いた自称セルフメイド・マンの銀行家兼工場主、バウンダビー氏に明らかに影響を与えた人物である。ギヤスケル夫人は近代看護学確立の功労者であるフローレンス・ナイチンゲールの家族と交流があった。批評家A・W・ウオードはナイチンゲールが『ルース』を素晴らしい作品と思っただけでなく、「冒頭からすぐにルースを病院の看護婦とするのではなく、他にも色々看護の経験をさせたのちに看護婦になるようにした」点を賞賛したという話を引用している。ギヤスケル夫人は自分がどういふ状況について書いているのかを知っていた。その証拠に、コレラが流行した時に彼女がマンチエスターで牧師の妻として経験したことは、この小説で当時の医療の現実を十分に反映した形で活写されている。

『ルース』はショックを受けたモリスたちからの反発を即座に招いたが、この質の高い、勇気ある作品を多くの批評家や読者がほめたたえた。そういった攻撃を受けてギヤスケル夫人は病気になるってしまったが、自分の作品に対しては「小説にふさわしく

ない主題であるからこそ、そのことについて意見を言わざるを得ないのです。私は以前そのように思っていました。今こそ声を大にして自分の考えを言うことに決めました」と述べて弁護した。とはいえ、『ルース』は自分の娘たちに読ませてならない本であることをギヤスケル夫人は認めていたようである。

次に、ギヤスケル夫人は幾分いやいやながらであったが、『暮らしの言葉』に長編小説を連載してほしいというディケンズの頼みを受け入れた。それは彼女の最後の社会問題小説となる『北と南』である。これに取りかかる前に彼女は旅に出て友人を訪ねた。特記すべきは一八五三年九月のハワース訪問である。そこで生前のシャーロット・ブロンテに会ったのは、これが最後だった。新たにできた友人としてはパリのサロンの主催者マダム・モールがいる。そのパリの家はギヤスケル夫人がやがて何度となく外国を訪問する際の基地となった。五四年のはじめ、この小説に彼女は着手したが、まだタイトルも決まっていなかった。彼女はその頃『ハード・タイムズ』を連載中のディケンズに対し、自分が小説の中心的なエピソードにしようと考えているストライキを、彼もまた題材として使うのかと熱心に尋ねた。この場面では、ジョン・ソントンがアイルランドの移民たちをスト破りとして雇っている木綿工場を、怒り狂ったストライキ参加者たちの群集が襲撃しようとする。あからさまな剽窃を心配していたギヤスケル夫人に

対し、『ディケンズはそういう詳しいストライキの場面を『ハード・タイズム』で描くつもりはないと言って安心させた。『北と南』の背景はまたもやマンチェスターで、今回はミルトンと呼ばれている。ヒロインのマーガレット・ヘイルはイングランド南部の田舎町ヘルストーンで生まれた育ちのよい娘で、ほとんど金も地位もなく、工業化された厳しい北部の都市へ両親とともに突如として投げ込まれる。そして工場主ソーントンが彼女に恋をする。最初、二人は相手の社会的背景を蔑視していたが、それぞれの背景がそなえた特性を途中から正しく認識するようになり、最終的に相互の価値を理解するようになる。

『北と南』の筋の展開は決して単純ではない。プロットだけでなく、様々なテーマや一連の階級間、人間間の関係を明らかにするためのサブプロットまでが、複雑な構造をなしている。イングランド南部で田舎牧師をしていたマーガレットの父ヘイル氏は、伝統的な信仰箇条に疑問を抱き、聖職を辞して北部へ移り住む。ミルトン出身の裕福な友人の忠告に従って、いったんヘイル家の北部への移動がなされると、小説は計画的に力強く展開していく。雇人と雇主、労働組合員と非組合員、富と貧困、偏見と偏見が対立する中、幾層もの階級間の緊張が示される。ヘイル氏は古典を教える個人教授となり、ヘイル夫人はかたくなに上流意識を持ち続けながら、次第に気力が衰えて死んでしまふ。労働者のリーダー

であるニコラス・ヒギンズは無神論者であったが、工場のひどい労働環境が原因で肺病を患って死んでいく娘のベッシーとマーガレットの友情を通して、少なくとも宗教に対しては敬意を抱くようになる。ここでもまたギヤスケル夫人は行方不明になった兄ジョンを思い起こさせるサブプロットを使っている。マーガレットの兄フレデリックは海軍将校だったが、サディスティックな大佐に衝突した結果、反乱の責めを受けて外国に住まねばならなくなる。彼は死に際の母に会うために名を変えて戻ってきたが、マーガレットの隠れた恋人ではないかとソーントンから疑われる。込み入った話を支える幾つものサブプロットが、ギヤスケル夫人の常用する主題である理解と和解を通して、大円団に向かって進んでいく。ストライキのあとソーントンは失業中のヒギンズに仕事を与える。財産を受け継いだマーガレットは、ソーントンの工場を救っただけでなく、ヒギンズと一緒に労働条件を改善するという試みを破産のために台なしにしてしまったソーントン自身をも救ってやる。そうして最後にマーガレットとソーントンは結婚する。

このようなコントラストとテーマは、プロットの要約だけではとても示すことができないほどの力強さと不思議な魅力を備えている。たとえば、ヘルストーンの美しさはミルトンの醜さと対照をなすが、美しさが無知と残酷さを隠す仮面であるのに対し、醜



さは知性と活力を隠す仮面となっている。更に、ヘルストーンとミルトンの価値観は、贅沢で怠惰なロンドンの上流階級と並列されている。『北と南』は、すでに頭をもたげていた新しい産業都市のパワーを讀者に周知徹底させ、人々の先入観をひっくり返した。この小説は、一八五四年九月二日から翌五五年一月二十七日にわたって『暮らしの言葉』に連載され、その年の間に幾つかの小さな点が変更され、再出版された。これはギヤスケル夫人の最も巧みで、最も面白い物語の一つである。少なくとも結末付近まで、その構力には目を見張るべき進歩がうかがえる。彼女の経験が広がり、政治への関心が深まった結果、社会問題への判断力は成熟した考えに基づいた公平なものとなっている。

ギヤスケル夫人が全部で六百ポンドを得た『北と南』には、幾つかの点で彼女の作家としての進歩が見られる。まず第一に、彼女は意識して古い田園社会と新しい産業社会との比較をしている。田舎と都会が比較される時、新しい社会が優位に立つ。その証拠に、マーガレットは「世の中は変化がなければ後退するだけです」と言っている。第二に、ヒロインの情緒的・知的成長に関する詳しい分析を中心に、複雑なプロットがしっかりと時間的に沿って構造化されている。『北と南』において、ギヤスケル夫人の小説家としての自信を示すものとしては、自分の書き方を修正してディケンズの好みに合わせることを遠回しに拒んだことが挙

げられる。事実、『北と南』は週間連載にはあまり適していない。ディケンズが欲求不満をつのらせたことは理解できるが、凝縮せざるを得なかった作品の結末について、彼女は単行本での出版の時に書き直してしまった。彼女は制約の緩やかな『コーンヒル・マガジン』に書くようになって、ようやく再び長編小説を連載する気になったのである。

『北と南』の完成後、いつものようにギヤスケル夫人は外遊することで疲れをいやした。今回はパリとロンドンである。そして外遊中に、彼女はシャーロット・ブロンテが三月三十一日に死んだという知らせを受けることになる。驚いたことに、シャーロットの回顧録のことを考えていた時、この親友の父と夫が二人そろって、彼女に正式な伝記を書いてくれるようにと依頼してきた。そうして、六月十八日、彼女はブロンテ姉妹の作品を出版していたジョージ・スミス宛に、伝記執筆を引き受ける旨の手紙を書いた。以後二年間、彼女はこの執筆だけに従事することになる。精を出して仕事に専念し、骨身を惜しまず描写の正確さに心がけた。入念な調査のためにシャーロットが留学したブリュッセルでは二週間を費やしたほどである。一八五七年の春、ついに伝記は出版の準備ができ、ギヤスケル夫人は二人の娘を連れてローマへと旅立った。『シャーロット・ブロンテの生涯』は三月二十五日に出版され、スミス社は彼女に八百ポンドを支払った。

『シャーロット・ブロンテの生涯』はたちまち大成功を収め、偉大な伝記の一つとして地位を確立した。ギヤスケル夫人は当時の慣例に従った（たとえば、シャーロットのプリユッセル時代の恩師エジェ氏に対する愛情を包み隠さずに書くことをしなかった）にもかかわらず、これは真実を追求した点で率直かつ完全な伝記だと言える。今なお、『シャーロット・ブロンテの生涯』は、ひととき優れたヒロインの成長と動機に関する詳細な描写として、また著名なブロンテ家とその背景についての詳しい研究としての価値を保っている。

しかしながら、この伝記に対する反応はギヤスケル夫人自身に大変な苦痛をもたらした。最初に訪れた賞賛の波に続いて、すぐさま伝記で扱われた関係者の何人かから、激しい抗議の波が押し寄せた。訴訟も辞さないというケースも幾つかあった。要するに、これらのケースではブロンテ家に対する共感のあまり彼女の判断が影響を受け、偏った見方をしてしまったのである。夫とジョージ・スミスの助けによって、この問題は法に訴えられることもなく解決した。しかし、スコット令夫人のケースでは、家庭教師を首になったことに関するブランウェル・ブロンテの説明をギヤスケル夫人がうのみにし、その理由を彼が雇主の奥さんの誘惑を拒んだからだと言ったために、その箇所を取消説明を『タイムズ』紙で公表しなければならなくなった。ギヤスケル夫人はシャー

ロットの親友であるエレン・ナッシーに対し、「私は復讐という大変な面倒を背負い込んでいます」という悲しげな手紙を書き送っている。結局、修正された第三版が一八五七年八月二十二日に出版された。これが現在のスタンダード版となっている。

『シャーロット・ブロンテの生涯』が成功したのは、ギヤスケル夫人が小説を書くようにそれを書いたからである。同じ年、彼女はもう一つ（政治家の）伝記を書いてくれというジョージ・ミスからの要請を断ったが、その際の彼女のコメントには鋭い自己分析が見られる。「私が書きたいのは、ある特定の時代の人物と風俗習慣です。前世紀のヨークシャーを生きた偉大な地主の伝記ならば、結構うまく書くことができると思いますが、政治家ではどうすることもできません。」人物、風俗習慣、特定の時代、特定の地域社会、それが彼女の生まれながらに得意とする分野であった。しかし、彼女がヨークシャーと前世紀のことについて触れたのは、非常に興味深い。なぜならば、これが彼女の次作『シルヴィアの恋人たち』の背景となるからである。この小説はその雰囲気と心理的洞察の幾分かを『シャーロット・ブロンテの生涯』に負っているのである。

『シャーロット・ブロンテの生涯』が出版される前に、正確には一八五七年二月十三日にギヤスケル夫人はイングランドを離れ、カーニヴァルが催されていたローマに行き、そこに住むアメ

リカの彫刻家ウィリアム・ウェットモア・ストーリーの客となった。この時の休暇はその後いつも、ローマ自体から得た印象だけでなく、ストーリーの友人であった（のちにハーバード大学で美術史の教授となる）若きチャールズ・エリオット・ノートンとの生涯にわたる友情、批評家ウィニフレッド・ジェランの表現を借りれば、「半ば母性的、半ばプラトニックな」友情の始まりとして、彼女の人生の中でも最高の時として思い起こされた。二人の間の手紙はギヤスケル夫人の晩年を知る上で貴重な情報源となっている。『シャーロット・ブロンテの生涯』に加えられた非難が、正当なものであるうとなかろうと、ギヤスケル夫人の心に書くことへの嫌悪感を一時的に呼び起こしたことは否定できない。それにもかかわらず、彼女の生活はいつものように積極的な知的活動、社会への奉仕、家庭の幸せを中心に進んでいった。元気を回復して帰国すると、彼女を待っていたのは例の伝記に関する「大変な面倒」、そしてマンチエスターの生活と小説家としての仕事の再開であった。

伝記執筆の時に始まったギヤスケル夫人と出版業者ジョージ・スミスとの関係は、この頃までには商売だけでなく友人としても進展していた。彼女は一八五九年の末頃には「捕鯨の一等船」のことで彼と連絡を取りあっていた。スミスの新しい定期刊行物『コーンヒル・マガジン』は、一八六〇年にディケンズが『暮らしの言

葉』の後継雑誌として創刊した『春夏秋冬』よりも、彼女の晩年の作品に適した発表の場を提供することになった。つまり、作品の長い区切りや月間雑誌という形態の方が、彼女の書くような小説には適していたし、彼女もそつした雑誌に自分のよい作品を取っておきたいと思ったのである。『シルヴィアの恋人たち』が『コーンヒル・マガジン』に連載された理由は、「一巻本の物語を分冊で掲載するのはいやです」というスミス宛の手紙にはっきりと示されている。『シルヴィアの恋人たち』の完成までは、ギヤスケル夫人にとって特に精力的な期間だった。家では忙しい牧師の妻として、そして四人の娘たちの将来を心配する母として、やらなければならない色々なことがあった。一家の主婦として、著名な作家として、多くの訪問に時間を取られた。一八六一年にマンチエスターが英国科学振興協会の年次総会を主催した時などはいい例で、彼女の家は訪問客で一杯になった。しかし、マンチエスターが彼女の健康と気分には及ぼした影響を考えると、たとえいつものように執筆の合間であっても、（大好きなシルヴァデルの海辺であろうと、ハイデルベルクやパリであろうと）彼女には休暇が絶対に必要であった。彼女は旅をしながら題材を集め、マイナーな物語や記事を素早く書き上げ、主としてディケンズに送ることで、外遊のための資金を稼ぐことがよくあった。その意味で、『シルヴィアの恋人たち』の舞台を調査するために、一八五九年

十一月に娘たちを連れて、ノース・ヨークシャー州の港町ウィットビーへわざわざ出かけたのは、彼女にとって特別なことだったと言える。

この小説は最初すごい勢いで書かれたが、家事や家庭内の問題で一八六〇年の暮れには、まだ四分の一しか終わっていないかった。作品の執筆は断続的に進められ、六一年から六二年にかけて一時的に『フィリップの偶像』というタイトルが付けられたが、その大半はギヤスケル夫人の旅行中に書かれたものである。作品を書き終える前のことだが、アメリカ南北戦争による綿花不足で一八六二年に供給がストップし、マンチェスターはたちまち不況に陥った。それで彼女はこの問題を気分転換に取り扱ってみようという気になった。そういった気持ちは、九月にサセックス州の海岸町イーストボーンで執筆に専念していた時、彼女がスミス宛に書いた手紙の中に表われている。「私たちはマンチェスターへ（そして抑圧的な環境の中、人を心身ともに疲れさせる仕事へ）戻らなくてはなりません。」彼女の想像力と生命力を衰えさせた、そうした不況と疲労感は、『シルヴィアの恋人たち』の最後の巻にはつきりと感じ取れる。この小説は年末までに書き上げられ、彼女は十二月三十一日にスミスから千ポンドの支払いを受けた。そして、翌六三年二月に『シルヴィアの恋人たち』は、「愛する夫へ、その価値を一番よく知る者より」という献辞とともに、三巻本とし

て出版されることになる。

『シルヴィアの恋人たち』におけるテーマの多くは、この小説に影響を与えた初期の作品に見出すことができる。ウィットビー（小説ではモンクスヘイヴン）の背景、捕鯨産業、強制徴募隊に対する一揆などは、彼女が前に書いた短編の中で扱った資料であり、プロットのクライマックスとなる死んだはずの夫が帰還する話は、一八五八年の『暮らしの言葉』のクリスマス特集号に載った「マンチェスターの結婚」で使われたものである。『シルヴィアの恋人たち』は幾分メロドラマ的であるものの、力強い物語の中心を占めるのは、ヒロインのシルヴィア・ロブソンである。シルヴィアの中にギヤスケル夫人は、小説の四分の三までは欠点を見出すことができない、それほど彼女の作品では比類のない激しい情熱を描き出した。ギヤスケル夫人は自分自身の娘たちが成熟し、喜び、苦しむのを見てきたし、シャーロット・ブロンテの生涯について深く考察したという経験を持つ。そうした経験はすべて彼女の想像力の中でシルヴィアの物語に結集された。シルヴィアは初めのうち従兄のフィリップを蔑視し、捕鯨の一等銜キンレイドに恋をする。キンレイドは強制徴募隊に連れ去られ、フィリップは彼が死んだという偽りの報告をする。父が暴動の責めを負って処刑されたあと、気を滅入らせたシルヴィアはフィリップを夫として受け入れる。こういったエピソードが互いに溶接されたシ

ルヴィアの恋人たち』は、読者の関心をつなぎ止める緊密な構成の語りとなっている。いつものようにギヤスケル夫人は、ここでも地方の情景や庶民生活の描写において秀でていて、とはいえずこの小説に力強さを与えているのが、シルヴィアの激しい感情と生命力であることは間違いない。ギヤスケル夫人の人生観は悲劇的なものを受け入れようとするものだが、それは換言するならば、世界は人間の努力によって改善できるという考えである。『シルヴィアの恋人たち』の最初の二巻はエネルギーがあふれており、シルヴィアの性格同様に、生き生きとしたユーモアに満ちている。しかし、姿を消したフィリップがこっそりと帰郷し、死ぬ前に自分の娘の命を救い、最後に妻と和解する結末は、不自然な作り事之感を幾らか呈していると言わざるを得ない。

一八六三年頃、ギヤスケル夫人は以前より静かな、あまり精力的ではない生活様式に移っていた。パリでの休暇から戻って、ジョージ・スミスから『コンヒル・マガジン』のために物語を要請された時、彼女はすでに書き始めていた中編小説『従妹フィリス』を差し出すことができた。他の幾つかの短編と一緒に、この小説の版權を彼女は二百五十ポンドで売った。それで『従妹フィリス』は一八六三年十一月から翌年二月にかけて連載されることになる。ナッツフォードの世界に基づいて、ギヤスケル夫人が『従妹フィリス』で創造した地域社会は、時代の変化を受けていた。

フィリスが密かに愛していたホールズワースは、カナダで結婚したという旨の葉書を寄こし、彼女の希望と健康を粉みじんにしてしまうが、この葉書は一八四〇年に創設された「ペニー郵便制」によるものである。一八六二年十二月十二日には鉄道がナッツフォードに開通したが、この作品で描かれる鉄道は、物理的にはディケンズの『ドンビー父子』（一八四六、四八）の場合ほど破壊的ではないものの、発達した産業と新たな種類の人間をホープ・ファームという田園的な舞台へ導いてきた。ギヤスケル夫人の祖父が住んでいたサンドルブリッジ・ファームを思い起こさせるような、まだ肉体労働と健全な道徳観に基づいた安定した世界に変化がもたらされることになる。

『従妹フィリス』は筋が錯綜した物語ではない。見所は物語の展開と語りの手法にある。鉄道開発で技師の見習いをしている十九歳のポール・マニングが初めて従妹を訪れた時、彼は「君に会ったあと数日、ぼくの服には野バラと洋種ハクセンのにおいがしみついていたらよ」と言うが、これはどこか牧歌的な田舎の奥まった所へ迷い込んだような感覚を表わしている。そうした新旧二つの世界の接触から変化が生まれる。そしてポールの上役で当世風のホールズワースに対する恋心によって、フィリスはおとなしい少女から悩める女性へと変化し、失恋によって健康を害してしまう。野心家のホールズワースは、自分の仕事に後押しされてフィリス

とホープ・ファームを乗り越え、出世のためにカナダへ渡るが、同時に感受性のなさや道徳的眼識のなさが彼の欠点としてそれとなく示される。フィリスは最後に健康を取り戻すが、健康の回復のための転地に同意する時、次の彼女の言葉は時代の変化に対する皮肉な含みを持っている。「ほんの短い間だけよ、ポール！その後は 私たち、昔のような平和な状態に戻るのだから。そうなるわ、そうできるわ、そうしなきゃ！」

ギヤスケル夫人の中・短編小説の中で、多くの批評家が最高傑作と見なす『従妹フィリス』は、最後の小説『妻たちと娘たち』にふさわしい序曲となっている。『妻たちと娘たち』のアイデアは、すでに彼女の頭の中で細部にわたって進展していたので、彼女は一八六四年五月三日に完全な梗概をつけてジョージ・スミスに手渡すことができた。ある個人的な計画を実現させたいという彼女の願いもまた、この小説を仕上げる際の刺激となった。つまり、夫の定年後と独身の娘たちのために（実際には、一八八四年にマシオンチエスターで死ぬまで、彼が牧師をやめることはなかったのだが）、健康に悪いマンチエスターから脱出できるようなイングリッド南部の田舎に、家を買うことを彼女は考えていたのである。ついにギヤスケル夫人はロンドンから四十マイルほど離れたハンブシャー州オールトン付近のホリボーンに待望の家を見つけ、それを『妻たちと娘たち』の執筆でスミスから得た二千ポンドをもと

に購入した。しかし、彼女自身は健康がすぐれず、いつも決まった量の仕事をしなければならぬ圧迫で疲れ切っていた。そして、一八六五年十一月十二日（日曜日）の午後、彼女は新しく購入した家で三人の娘たちと談話中に、その墓碑銘によれば「何の警告もなく」心臓病に襲われ、帰らぬ旅の人となってしまった。ギヤスケル夫人はナッツフォードにあるユニテリアン派のブルック・ストリート教会の小さな傾斜した墓地に埋葬され、彼女の夫も十九年後に彼女のとなりに埋められた。

「日常の物語」という副題を持つ『妻たちと娘たち』は、一八六四年八月から六六年一月にかけて『コーンヒル・マガジン』に連載された。彼女の急死によって最後の分冊は書かれなかったが、結末は分かっていた。現存する小説は完成したも同然だったが、この小説のプロットは複雑である。それは劇的な作品構成というよりは、ナッツフォードをモデルとするホリングフォードの階級の違う家族間に見られる一連の人間関係に支えられている。舞台は『克蘭フォード』や『従妹フィリス』と同じように漠然とした時代に設定されているが、ギヤスケル夫人が少女時代を送ったナッツフォードは、ずっと大きな地域社会として新たに別の解釈がなされている。彼女の成熟した芸術性と判断力は彼女の生来の関心、特にヒロインの人物像と、いわゆるアンチ・ヒロインに対する関心と実にもことに融合している。シンシア・カークパトリック

クの中に、ギヤスケル夫人はシルヴィア・ロブソンほど悲劇的ではない、しかしより魅力的で洗練された個性を創造した。シンシアほど複雑ではないが、対照的な性格として描写される義理の姉モリー・ギブソンは、前途有望な科学者ロジャー・ハムレイと結婚することになる。この男の職業と性格は、ギヤスケル夫人の遠縁にあたる進化論の提唱者チャールズ・ダーウィンに基づいており、伝統的な価値観と新しい概念の結合を体現している。しかし、間違いない一番の出来は、シンシアの実母でモリーの継母であるギブソン夫人である。その話し方と振るまいを通して、ギブソン夫人は虚栄心の強い、どうしようもないほど了見の狭い（まったく意地が悪いというわけではない）性質をユーモラスに、かつ皮肉たつぷりに賞賛してできた人物である。このように、ギヤスケル夫人が見ている世界は、救いようのない本当の意味での悪漢がない世界である。言い換えれば、難儀や苦しみというものは、つらい生活、利己心、他人の気持ちに対する感受性のなさ、道徳的規範のなさによって引き起こされるのである。自分の画策によってモリーに重大な災いをもたらしたカムナー伯爵家の支配人プレストンでさえ、罪を犯すと同時に自分に対しても犯されるという読後感を我々に与える。

ホリングフォードは、村一番の金持ちから商人にいたるまで、社会が科学技術、ふるまい、思想を問わず、変わり行く世界と取っ

組み合わねばならない、そうした共同体として描かれている。『妻たちと娘たち』の連載は期間が長く、ゆったりしたペースだったので、ギヤスケル夫人は日常生活と人間心理を細かく描くことができた。誠実で善良なモリー・ギブソンは彼女が所属する階級（彼女はレディーである）だけでなく、性急な所や不自然な所が見られない彼女の精神的成長においても、それまで作者が描いたヒロインたちとは違っている。『妻たちと娘たち』を通して、ナッツフォードの世代に対するユーモラスな、皮肉のこもった、時には風刺的な見方が、深刻な基調とともに展開され、我々はギヤスケル夫人の小説家としての自信と成熟を強く感じずにはおれない。

ギヤスケル夫人の死のほんの数ヶ月前、ジョルジュ・サンドは次のように言った。ギヤスケル夫人は私や他のフランスの女流作家ができないことを成し遂げました。彼女は世の男性にこの上ないほどの深い関心を引き起こす小説を書いただけでなく、少女が読めば必ずよい女性になる類の小説を書いたのです。ギヤスケル夫人はジョルジュ・サンドやジョージ・エリオットのような知的な作家ではないが、聡明で非常に博識な作家である。彼女はあらゆるタイプの人間の行動と活動に強い関心を示していた。その関心は彼女の小説のみならず、エッセイや短編小説に対しても、多くの題材を提供してくれた関心であった。一九七八年にジェイム

ズ・ドナルド・バリは最近のギヤスケル批評を要約して、「彼女がヴィクトリア朝の一流の小説家たちの中でも最上の部類に入るのは確かだが、おそらく最近は一流の部類に入りつつあるかもしれない」というコメントを残した。それ以来、個々の作品や短編小説が多くの版（主としてペンギン、オックスフォード、エヴリマン各社のペーパーバック版）で、しかも著名な批評家の序文と注釈つきで利用できるようになったし、近年では極めて詳しい伝記や研究書が陸續と出版されている。これらは彼女の名声が一流のものとして固まるのに大いに貢献している。

これは、カナダのローレンシア大学エドガー・ライト (Edgar Wright, Laurentian University) 教授が『文学伝記辞典』(*Dictionary of Literary Biography*) [Detroit: Gale Research Inc., 1973] XXI, 174-188) のために執筆した「ギヤスケル夫人 (Elizabeth Cleghorn Gaskell)」の項目を取捨選択して翻訳し、更に修正・加筆したものである。このような形での書き換えを快く許可してください。ライト教授には、この場を借りて深甚なる謝意を表したい。ギヤスケル夫人のメーリング・リスト (詳しくはウェブ・サイト <<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsukae/EG.ML.html>> を参照) の会場で、貴重なコメントを寄せられるライト教授には、主著書として Mrs. Gaskell: *The Basis for Reassessment* (London: Oxford University Press, 1965) と *The Critical Evaluation of African Literature* (London: Heinemann Educational, 1973) などがある。